

次回イベント情報

4月18日（金）19:00～21:00

◎「学ぶ」をおもしろがる会 ～雑談会「4月、どんな感じ？」～

本や学びや merkki じむ室にて

参加費：500円 中学生以下無料 途中参加・退室OK

4月。新年度。新学期。新たな挑戦？新たな始まり？ドキドキ、ワクワク。
いろいろな気持ちのまま2週間ほど。どんな感じですか？少人数で話してみない？愚痴、抱負、なんでもOK！

4月26日（土）16:00～18:00

◎「学ぶ」をおもしろがる会 ～お金から社会を覗く～

本や学びや merkki じむ室にて

参加費：500円 中学生以下無料 途中参加・退室OK

書籍『お金のむこうに人がいる/田内学（ダイヤモンド社）』をもとに、
お金や社会について考えてみようと思います。書籍は事前に読んでも読まなくてもOK。※当店で中古本あり お気軽にどうぞ～。

5月18日（日）11:30～17:00

◎AWAJISHIMA BOOK MARKET

S BRICK（兵庫県洲本市塩屋1丁目1-8）にて

入場料無料

「本の作り手から、本を買う。」をテーマに独立系書店「ASOBU KAPPAN」が主催。ブックマーケット（本の即売会）のほか、トークショーやワークショップなども開催。当店も出店。

フェア

「勝手に文学フリマ風」



2025/4/18（金）から

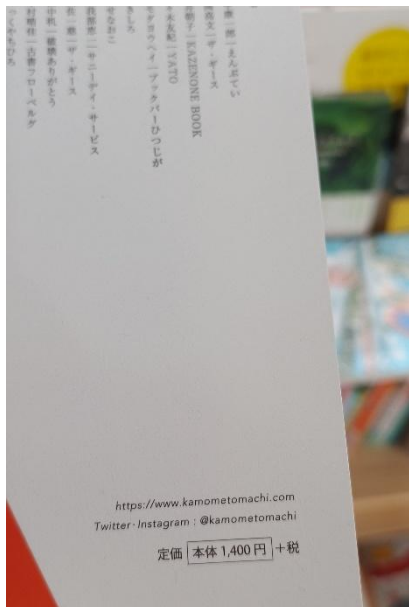
2025/4/19（土）まで

本や学びや merkki にて開催

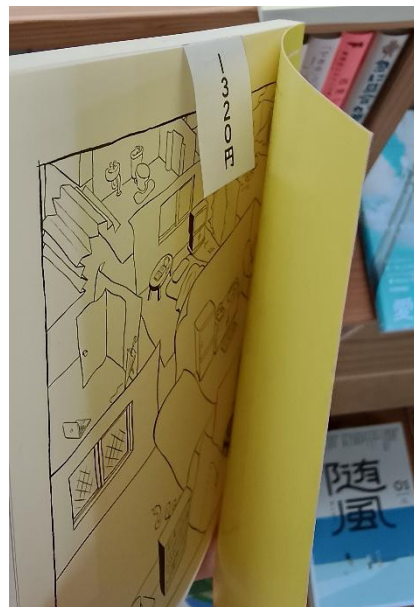
○フェア「勝手に文学フリマ風」とは

県外で催される文学フリマ。そして、それを機に発表・発売されるおもしろそうな本の数々。著者にも会えるというなんとも羨ましいイベント。東京ではとくに参加者も多く、徳島では会えないような出版社も多数。そんなの指をくわえてみてるなんて辛すぎる…！という、なんとも個人的な理由から店内を使つてのフェアを企画。それが、「勝手に文学フリマ風」。なんとも控えめな名前、でしょ？

○店内の本の価格表示について



裏に記載がある場合



裏に記載がない場合
(表紙をめくってすぐの箇所に値札)

○本をつくるひとの紹介

一応、今回陳列する本をつくった方々の紹介を書きました。その中で、出版レーベルや出版社、本屋、個人、などざっくり分けております。すべて本や学びや merkki 店主の勝手な判断なので、文句はこちらにまでお願いします（本当は文句なんてぶつけないでほしいです。あたたかい目で読んで、気になったら、ぜひお調べください。だってそもそも出版レーベルと出版社の違いだって危ういんだもの）。

☐公：公式ホームページ等にある文章を参考に店主（じーも）がまとめました。

☐つ：店主（じーも）のつぶやきです。

【出版レーベル等】

◎ぼくみん出版会

☐公：作家の安達茉莉子さんや三輪舎の中岡祐介さんとの縁をきっかけに、2025 年より、ぼくみん（株式会社 bokumin）が始めた出版レーベル。書店や出版社で働いた経験があるメンバーはいない中、三輪舎さんに手伝ってもらいながら、今回の書籍刊行に至る。

☐つ：『らせんの日々 作家、福祉に会う』というタイトルに惹かれる。「らせん」というぐるぐるとまわりながらも気付けば次の階へ進んでいる、という表現が好き。

◎書肆 imasu

☐公：ちいさな会社（志学社）を構えて早 6 年。いろんな失敗をして、たくさんの人に助けられて、少しずつ勉強して。辿り着いた一つが「ひとりレーベルをつくる」こと。効率から少し距離を置いて、あえて手間暇をかけていきたい。

☐つ：エッセイは好きでよく読む。ある日、SNS で目に入ったのは「随筆復興を推進する文芸誌」。おいおい、なんだそりゃ。気になりすぎるではないか。しかもサイン本もパターンがあり、選ぶのも楽しい。

◎シゴトヒト文庫

公：日本仕事百貨という、「世の中にはいろいろな生き方・働き方があることを伝えるメディア」がつくったレーベル。新しい仕事のあり方を伝える目的がある。

つ：『生きるように働く（ミシマ社）』という本で日本仕事百貨を知る。そこに書かれたひとつひとつが気になった。そうやって働くことに興味があって、こんなにもじっくりとくる本もないな、と思った。

◎ループ舎

公：奈良で活動する出版・デザインレーベル。おなじ会社で靴や日常着、カフェなども行っている。

つ：おもしろい雑誌を探していたところ、1冊丸ごとひとりをフォーカスしたインタビューマガジン『気になってるん!』を発見。しかもよく見ると刊行した本は靴に関連するモノが多い。なんと靴屋でもあると！それはびっくりです。

◎木舟舎

公：新潟市内野町を拠点に活動する、創作雑誌・zineの出版レーベル。お米を売ったりイベントを開催したりすることも。

つ：四国徳島の池谷駅にて行われる「無人駅本店」で『つくる人とつくる雑誌「なわない」』に遭遇。なんだか気になって読んでみると、おもしろい。以来、雑誌にハマるきっかけとなる。

◎森社

公：2024年始動のひとり出版レーベル。ある晴れた日のつむじ風のようにあたたかくて心がすこし舞い上がる本を。2025年春には、連れて帰れる本とアートのお店をオープン予定！

つ：絵本である『いっぽうそのころ』のタイトルと表紙にやられる。そんな気になるの、ありなの？と。一度気になっちゃうと仕入れちゃうよね。

◎日々詩編集室

公：三重県で「わかち合う時を求めて、わたしたちの共有地をつくる」をコンセプトに本をつくる。「物語」でわかち合うために。

つ：『存在している 書肆室編』や『だれかといない場所』など。タイトルに惹かれる。なんだかわからないけど、それだけで肯定してくれている気がする。

◎ひとりごと出版

公：「ひとりごとのような個人的で小さなことに生活を豊かにするヒントが隠れている」という信念のもと、心の風通しを良くするような本をつくることを目指す。読み終えたあと、少しだけ見える景色がちがうようになっていたらいいな。

つ：本も読んでいて行きたかった東京の新刊書店、本屋 Title へ行った時のこと。出会ってしまった。しかも両開き。真ん中の方に終わりがあるというつくりびっくり。即購入しました。

◎地下 BOOKS

公：2018年生まれのインディ出版レーベル。地下から起こす読書の革命。

つ：徳島にある「泊まれる本屋まるとしかく」。イベントで一緒させていだいたときに、『未知を放つ』を購入。すごい響いてしまった。すぐさま検索し、仕入れることに。

◎十七時退勤社

公：社長(出版社の営業)と副社長(製本屋)と顧問(中央線某書店員)とインターン(いか文庫店主)と後援会会長(どむか主宰)による個人出版レーベル。

つ：まずレーベル名がおもしろい。思わず二度見してしまう。それでいて『製本と編集者』や『本を抱えて会いにいく』など気になる本がたくさん。気が付けば取り扱いが増える。

◎hoshiboshi

公：「星々」は、生活者の創作に寄り添う文芸創作コミュニティ。ほしおさなえ（小説家）と有志のスタッフで運営。雑誌をはじめ、様々な活動に取り組む。

つ：知ったのは雑誌『星々』。特集が「書店」「紙」「本をつくる」など、本好きにはたまらない。もちろんほかの特集も気になるけれど。やっぱりいいよね、紙の本。

◎物語のアトリエ

公：2023年に出版レーベルとして立ち上げ。母語をはぐくむマルチリンガル絵本や児童書の刊行を行う。

つ：『ほんとうにだいじょうぶ？』という書名が語りかけてくれるようで、やさしい。一度店内に外来語を母語とする方が来たときの経験から、複数言語の表記はいいな、と感じる。

◎アトリエ風戸ブックファーマシー

公：紙の本と街の本屋が好きな、元書店員が立ち上げた出版レーベル。2022年12月末に勤め先の本屋が閉店した事をきっかけに、自費出版の本を作るように。

つ：装丁に惹かれる。『わたしのすきな 本屋の灯り』や『わたしのすきなふつうの本屋が閉店』とのタイトルに合う。SNSで見かけ、すぐに仕入れを決める。

◎京都文鳥社

公：京都鴨川荒神橋の書籍出版レーベル。

つ：『死ぬまで生きる日記/土門蘭（生きのびるブックス）』を読んで、この方の本をもっと読みたい、と思ったのがきっかけ。探していると、行き当たったというわけ。うん。やっぱり、いいよね。

【出版社】

◎里山社

公：里山を「人間にとってなくてはならないものでありながら、周縁に追いやられ、失くなりつつある」と位置づけ、そんな里山のような本をつくりたいという想いをもつ。

つ：自然と共生の結果としての里山。そんな風に最近里山について考えを巡らすことがあり。すると『里山通信』なるものが…！これは早速仕入れねば！

◎ている舎

公：わたしたちを物質的・経済的に豊かにしてくれた「物語」は今の時代には合わない。「つくる喜びがもっとも大切」という創造性主義の立場にたち、出版、学び、働き方、コミュニティのあり方を根本からリデザインし、具現化していきたい。

つ：今現在を生きていて、立ち止まり。そもそもの価値基準だったりを自分の中で見つめ直せる気がする。『新百姓宣言』はそんな本だった。

◎夏葉社

公：良い本ってなんだろう。1万人、10万人の読者のためにではなく、具体的なひとりの読者のために、本を作っていきたい。ひとりの読者が何度も読み返してくれるような本を。

つ：『あしたから出版社（晶文社）』を読んで、知る。そのひたむきさにじーんとなる。刊行した『さよならのあとで』を読む。これまたじーんとなる。

◎秋月圓

公：3社の出版社を経て、2024年創業。「屋号があれば、もう出版社」という「師匠」の言葉を信じて。70年前に祖父母が高円寺で営んでいた中華料理屋の名を継ぐ。

つ：前述の夏葉社で働いた経験をもつ。『夏葉社日記』は「師匠への長い長いラブレター」らしい。そんなの、読みたくなるじゃないか。

◎鹿美社

公：哲学〈真〉芸術〈美〉宗教〈愛〉に強く関心を持ち、言葉の可能性について考えている。古典を重んじながら、少しでも読者の方々と共に新しい世界を切り拓いていければ。

つ：尺八を吹くことから日本というワードが気になる。そんな時に会ったのが『日本のうた』。「外国人から見た日本の姿」だなんて、読みたくなるじゃないか。

◎倉貫書房

公：ソニックガーデン（「納品のない受託開発」）というシステム開発会社が始めた出版事業。末永く読んでいただける本を、必要としている人に届けられるように。

つ：『私はロボットではありません』というタイトルに惹かれる。後々『管理ゼロで成果はあがる』や『ザッソウ』という書籍で見たことのある組織であったことに気付く。過去には縁あってイベントで一緒させていただいた。

◎小鳥書房

公：「たったひとりの誰かが心から喜んでくれる」そんな思いから。たくさんの方に支えてもらいながら、のんびりと歩みをすすめる。誰かの思いを誰かに届ける、郵便屋さんのような出版社を目指す。

つ：SNSで見かけ気になって調べると、「たったひとりのための本」を届ける出版社、とある。おいおい、やられちゃったぜ。しかも徳島に来る用事があったとのことで以前お店にも来てくれる。何かと縁を感じる出版社さん。

◎月と文社

公：「日常をもっと、味わい深く」10年後、20年後に、本棚に置かれたその本をふと見つけたときに、昔の自分と対話するような気持ちになってもらえればいいな。

つ：『こじらせ男子とお茶をする』に出てくる人物の半数が四国出身。減多に地元の名前が本に出てくることなんてないから、それだけでも嬉しくなってしまうて、すかさずx（旧 Twitter）へ投稿。

◎クルミド出版

公：西国分寺にある、こどもたちのためのカフェ、クルミドコーヒー。「表現」の可能性を感じ、「表現」の先にあるものとは。もしどこか遠いところで自分の愛する人と小さく暮らすなら、どんな本を持って行く？クルミド出版、はじめます。

つ：『ゆっくり、いそげ（大和書房）』でクルミドコーヒーのことを知る。仕組みというか組織の在り方について、とっても考えさせられる。最近続編である『大きなシステムと小さなファンタジー』が刊行。そりゃすぐに仕入れちゃいますよ。

◎rn press

公：2021年に設立。「私ができることはささやかだけれど、本の力で“生きる力”が沸いたらよいと思う。」という想いをもつ。百万年書房より『生きる力が湧いてくる』を刊行予定。

つ：雑誌のおもしろさにハマっていたころ、『USO』という文芸誌を発見。ウソをテーマにした雑誌はなんだかとっても魅力的に感じ、入荷を決める。刊行予定の本も楽しみ。

◎真鶴出版

公：「町歩き」なども行う、真鶴の泊まれる出版社。ペースはゆっくりでも、小さな出版社だからこそできる造本やコンテンツをつくることを大切に。範囲は狭くとも、考えや思いを共有できる人に“濃く”出版物を届けていきたい。

つ：お店を開く前に行った東京旅行で『小さな泊まれる出版社』に出会う。そこにはこれまでのことが赤裸々に書かれてあった。刊行書籍には、なんと千物引換券がついた書籍まで。おもしろすぎる。

◎かくれんぼパブリッシング

公：北海道森町を拠点に活動する一人出版社。木陰や、遊具の中や、部屋の中にかくれている、あの子にも届くような”いい本”をつくりたい。

つ：刊行書籍『生＝創×稼×暮』。「生きる」「創る」「稼ぐ」「暮らす」「バランス」。そんな気になるワードばかり並んでしまったらもうお手上げ。著者の中には、これまで読んだことのある方たちも。これは、我慢できない。

【本屋等】

◎生活綴方出版部

公：本屋・生活綴方は、本を売る／買うだけの場所ではなく、綴（つづ）る／綴（とじ）ること。つまり、本を書き、本をつくるための本屋。

つ：SNSなどでもよく見る、欲しいなあという本たち。よく見ると、そこには「生活綴方出版部」の文字。すごいなあ。『ほかではあまり書けない話』なんて言われると見たくなっちゃうもん。

◎タイムトラベル専門書店 utouto

公：藤岡みなみが店主を務める書店。本と文房具と絵、時間のセレクトショップ。ある日とつぜん時空の裂け目からあらわれます。

つ：元々は藤岡みなみさんの『パンダのうんこはいい匂い（左右社）』がきっかけ。著書を探していて辿り着いたのがここ。どうやら店主らしい。

◎BREWBOOKS

公：西荻窪のブック&ビアスタンド。ウェブサイトで更新されていたリレー連載「ばんぶんぼん！」を一冊の本にしたのが『もう間もなく仲良し』。

つ：タイトルがずるいよね。こんなのは読みたくなっちゃう。しかもリレー連載なので、それぞれの色が出ておもしろい。

◎双子のライオン堂

公：「100 年続く本と本屋」というキャッチフレーズを掲げる。衰退産業と言われる出版業界の中で「本」そのものの魅力を信じ、「本」とそれに係わるモノの未来を切り開くことをヴィジョンとしている。

つ：開店前に読んだ『めんどくさい本屋/竹田 信弥（本の種出版）』で知る。本や本屋に関する本が好きで、自分が本屋をするときもそんな本を集めたいと思った。その結果、自然と辿り着いた気がする。

◎本屋 lighthouse

公：2019 年、畑のなかの小屋の本屋としてスタート。本は光となりうる。読むひとにとって。書くひとにとって。その間をつなぐ存在としての、灯台でありたい。

つ：本屋を営むひとの本は気になってしまう。そういうわけで、気付くと仕入れてしまっている。本屋 lighthouse の日記 ZINE シリーズ。とっても気になる。

◎本のすみか

公：2023 年オンラインショップ運営開始。2024 年実店舗開店。探している本はないかもしれないけれど、新しい本との出会いがあれば嬉しい。

つ：本や本屋に関する本は数あれど、オンラインショップなど多様な本屋のカタチを書いた本があまり見当たらない。ということで『いろいろな本屋のかたち』を刊行したそう。そんなの読めますよ。

◎ブタコヤブックス

公：愛知県名古屋市の新刊書店。（令和7年7月OPEN予定）。16年勤めた小学校教諭を退職し、書店経営と小学校の非常勤講師を両立する新たな道へ進むことを決意した店主が営む。

つ：メディアプラットフォーム「note」にて知り合う。元小学校教員が本屋なんて、知った瞬間に喜び爆発。本屋開業日記ZINE『起立、気をつけ、今から本屋を始めます。』なんて、最高のタイトルじゃないか。

【個人等】

◎KGIN 小屋

つ：本や学びや merkki のターナー（棚市のオーナー）。自身で作成した本を携え、文学フリマなどでも販売を経験。当店で作業に来てくれることも。5月18日に開催される「淡路島ブックマーケット」ではなんと100円小説を頒布予定だそう。気になる。

◎アドレナリン

つ：本や学びや merkki のターナー（棚市のオーナー）。なんといってもカレンダー形式の本、という衝撃。リビングでもトイレでも、立ちながらにして読書を愉しめるという新しい読書体験が生まれるではないか。出会った時には、すごいワクワクした。

◎夏森かぶと

公：書店員をしながら、エッセイを書いたりオンライン古本屋をやったり。2024年8月時点で、3部作累計1200部。

つ：『本のある日常』『本のある生活』『本と抵抗』。どれもこれもそそられるタイトルばかり。気になる気になる、で即座に仕入れを決意。すでに何度か複数回発注済み。

◎あかしゆか

公：海と山のあいだにある、不定期営業の本屋「aru（アル）」を営む。編集や執筆も行う。

つ：SNS で見つけた『わたしと地域の関係史』が気になり、辿っていくと、どうやら本屋を営んでいるらしい。しかもそれが本になっている、と。例にもれず、つつい仕入れを決める。

◎岡本真帆

公：歌人。高知と東京に拠点があり、フルリモートで会社員をしつつ、短歌をつくっている。

つ：自主制作『反復横跳びの日々』。おもしろそうなタイトル。しかも二拠点といえど、高知という圧倒的親近感。気になりすぎて、すぐに連絡。

◎中前結花

公：エッセイスト。2010年に上京。会社員を経て独立し、現在は多数のWebメディアで執筆中。

つ：『好きよ、トウモロコシ。/中前結花（hayaaki books）』を読み、なんともやさしい文章に他の本がないか探し始める。ある日見ると、新作が文学フリマで出るとな？そりゃ欲しいですよ。

◎植本一子

公：日記をよく書く写真家。自費出版をよく出し、著書も多数。

つ：『それはただの偶然』というタイトルにやられる。ほかにも魅力的な本がいくつも。そりゃ気になって仕方ないよね。

◎奥村真帆

公：フリーで執筆・編集を軸に活動中。SNS では文章や短歌、絵を発表。

つ：『なんでそんなこと急に言うん？』っていうタイトルを聞いて、見て、気にならない人はいるんでしょうか？こんなに共感してしまう言葉。しかも、中身もおもしろい。短歌って自由でいいんだなあ。

◎かもめと街（チヒロ）

公：浅草育ちの街歩きエッセイストが行う。『いつかなくなる まちの風景を記す』をコンセプトに好きなまちを語 Web マガジン〈かもめと街〉の執筆を中心に活動する。

つ：SNS で ZINE を見かける。いいなと思って調べてみると『決めない散歩』や『散歩するつもりじゃなかった』という日記 ZINE を発見。気になりすぎる。

◎とさちょうものがたり

公：高知県の土佐町から発信するウェブマガジン。ふわふわとした、実はここにしかないような「素敵なものごと」をふわふわとしたままあなたに届けようという試み。

つ：倉貫書房さんや泊まれる本屋まるとしかくさんの縁で一緒したイベントがきっかけ。そのときは鹿の角ガチャポンなど、他にも気になるものが。

◎サワラギ校正部

公：文字校正者。山深い島根県邑南町（おおなんちょう）に時々ひらく「本と本棚の店はしごとふね」の店主でもある。

つ：校正という仕事をはっきりと意識したのは牟田都子さんの『文にあたる（垂紀書房）』。そんな時に会った『自分でやってみる人のための 校正のたね』。素敵すぎる。